九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

三島由紀夫における死あるいは美 : 模範としてのメリメ

高木, 雅惠
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

https://doi.org/10.15017/16065

出版情報：Comparatio. 12, pp.44-54, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

三島由紀夫における死あるいは美

― 模範としてのメリメ ―

高木　雅惠

はじめに

『源氏物語』千年紀に今年はあたるとされている。この「かな」文字による平安朝の女流文学が日本の純粋な文学を代表することが述べられた三島由紀夫の『文章読本』一において、川端康成の短編と対比する形で西洋の短篇小説の模範としてメリメ（Prosper Mérimée, 1803-1870）の『トレドの真珠』(*La Perle de Tolède*, 1829)が挙げられている。また、昭和四十四年に発表された「小説とは何か」二においては『マテオ・ファルコーネ』(*Mateo Falcone*, 1829) が古典的短篇小説のお手本とされている。

三島由紀夫は、なぜ、このような位置にメリメを置いたのか。三島由紀夫が取り上げるメリメ作品はいずれも「死」そして「美」が重要な位置を占めているため、三島由紀夫における「死」そして「美」の問題をメリメ受容から考察してみたい。

一、三島由紀夫とフランス文学

三島由紀夫は、堀口大学訳によるラディゲ(Raymond Radiguet, 1903-1923) の『ドルジェル伯の舞踏会』(*Le Bal du Comte d'Orgel*, 1924)に強い関心を持ったことを度々明らかにしていたが三、近年発見された恩師清水文雄に宛て、昭和十六年に書かれた未発送書簡には、ラディゲの『肉体の悪魔』(*Le Diable au corps*, 1923) のような作品を書きたいとしていたことがわかっている四。いずれにせよ、ラディゲは三島由紀夫に少なからず影響を与えていたので、ここでまず三島由紀夫におけるラディゲについて確認しておきたい。

三島由紀夫にとってラディゲは教えられたものではなく、自ら発見したものであるとしており五、ラディゲについて多々述べているが、昭和二十八年六月に中央公論社から出版された『ラディゲ全集』に、「レイモン・ラディゲ」と題して示しているところでは六、「多かれ少なかれ天才でないところの、浪漫派詩人といふものは想像しにくい。」として「浪漫派詩人」がすべからく「天才」であるとし、「小説」に関してはラディゲが「天才」であるとしている。

> それは正に少年時代の私の聖書であつた。〔中略〕しかし少年の私をはじめに惹きつけたものは、人間心理への透徹した作者の目よりも、訳文の湛へてゐる独特の乾燥したエレガンスであつた。七

この昭和三十八年の時点で少年時代を振り返って述べているところでは、作品に惹きつけられたのは作者ラディゲの目よりも、訳出された文章の湛えている「独特の乾燥したエレガンス」であったことが示されている。その三島由紀夫の翻訳についての意識を昭和十七年の時点にさかのぼってみると、

原書の賛否如何、有名無名如何を問はず、如何に美しい完璧な日本語に移されたか、いかなる程度に日本の言霊の流れのなかに融け入らせることができたか八

と書いており、従来から古典的名訳と言われている上田敏の『海潮音』、永井荷風の『珊瑚集』を挙げ、そして「フランス文学の良訳」として、堀口大学訳の『ラディゲ　ドルヂェル伯の舞踏会』と並べて河出書房版『メリメ全集』について、「(概して良好)」であるとしている。また先の『文章読本』においても「翻訳の文章」と題して三島由紀夫の翻訳論が見られるが、そこでも杉捷夫の翻訳が、簡潔さと日本語の見事な正確さとで、志賀直哉の文章に比するとして、メリメの『マテオ・ファルコーネ』の翻訳文が挙げられている。従って、三島由紀夫は翻訳文の湛えるエレガンスによってフランスのラディゲに惹かれたことになるが、メリメ作品についてもここに見られる翻訳論からすると、翻訳の文章の見事さが三島由紀夫におけるメリメの位置付けに、少なからず影響を与えたとも考えられる。

三島由紀夫が高く評価するレイモン・ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』はラファイエット夫人(Marie-Madeleine Pioche de la Vergne, comtesse de La Fayette, 1634-1693)の『クレーヴの奥方』(*La Princesse de Clèves*, 1678)がもとになっているとされる恋愛物語であり、三島由紀夫はこの作品に惹きつけられたことが作品創出の源となり作家としての目標となったとしていた九。その『クレーヴの奥方』の作者、ラファイエット夫人については、

ラ・ロシュフコオ公爵、サント・ブゥヴ、時下つてプロスペル・メリメエの線上に姿を現はし、その不吉な先蹤となつた。一〇

とし、文学的位置付けにおいてメリメとラファイエット夫人とを同じ線上に見ている。従って、ラディゲとメリメを同じ線上に見ていたことになり、また、参考作品に分類され詳細は不明である「ラディゲ」と題されて書かれたものにおいて、ラディゲの性格を「メリメ的」と表現している一一。作品についての評価ではないが、三島由紀夫が神のごとくに崇拝し「天才」とするラディゲを形容するのにメリメを用いていることが確認できる。これらのことから、文学的位置付け、また作者としての位置付け、いずれにおいても三島由紀夫に大きく影響を与えたラディゲとメリメとは、遠からぬ位置に置かれていたと考えて間違いはないと思われる。次のような言葉も見られる。

—就中、ラディゲの「肉体の悪魔」を愛読してをりまして、そ

んなものをかきたくてたまりませんでした。[一二]

ところで最近発見された、恩師清水文雄に宛て昭和十六年九月に書かれていたこの未発送書簡には、ラディゲの『肉体の悪魔』のような作品を書きたいとして「公園前」[一三]を書いたことを告げている。ラディゲの『ドルジェル伯の舞踏会』と共に『肉体の悪魔』に心を動かされていたことは、この書簡により明らかであるが、ラディゲを語る時に『ドルジェル伯の舞踏会』が挙げられるのは、『肉体の悪魔』以上に『ドルジェル伯の舞踏会』に心を動かされたことによるものか、後に、研究書やフランス文学史を読んだことによるものか[一四]、いずれにせよ、『肉体の悪魔』に心が動かさていたことは確かである。その『肉体の悪魔』の冒頭部には、「カルメン」という名の清潔な感じのする少女が登場する。現在ではこの「カルメン」はメリメの作品『カルメン』(*Carmen*, 1845)によるものであることが明らかにされている。三島由紀夫が最初に読んだ時点で、果たしてこの「カルメン」がメリメの『カルメン』からのものであることに思いが及んだかどうかについては定かではない。しかしながら、三島由紀夫の蔵書には昭和十三年から十五年にかけて出版された『メリメ全集』があり、その『メリメ全集』については先に触れたように昭和十七年の時点で批評していることから、メリメの『カルメン』をこの前後にそこに見ていたこととしても不思議ではないと考えられる。

二、三島由紀夫におけるメリメ

三島由紀夫はどのようにしてメリメを受容したのかについて確認しておきたい。

幼少期の三島由紀夫に大きく影響を与えたとされる祖母が泉鏡花を好んで読んでいたことにより三島由紀夫も幼い頃から鏡花に親しんでいたとしているため、メリメ好きで知られる鏡花を通じてメリメの世界観に幼くして触れていたとも考えられるが、直接的な受容としては鈴木三重吉の世界童話集を読んでいたとしているため[一五]、三島由紀夫が初めて目にしたメリメ作品は、『マテオ・ファルコーネ』の三重吉による再話である可能性が高いと考えられる。その『マテオ・ファルコーネ』は先に触れたように、三島由紀夫において「お手本」とされる作品であり、繰り返し三島由紀夫が言及する作品となっている。

メリメの影響を辿ってみると、三島由紀夫が創作活動を始めて間もない学習院の学生であった昭和十四年に発表された作品『館』[一六]には、「ぷろすぺる公爵」という名の非常に残忍な公爵が登場する。この公爵は、ものをとると極刑に処する法律を定めたという設定になっているが、三島由紀夫が「良訳」としている『メリメ全集』、正しくは『プロスペル・メリメ全集』が刊行され始めた時期に書かれた作品で、前年の昭和十三年に『マテオ・ファルコネ』『トレドの真珠』が含まれた第二巻が出ており、昭和十四年一月には『イールのヴィーナス』(*La Vénue d'Ille*,

1837)『カルメン』『コロンバ』(*Colomba*, 1840) が収められた第三巻が出ている。三島由紀夫の蔵書にあり「メリメ作品を愛読していた」とし、またメリメ作品に多々冷酷さを見ていることなどにより一七、この残忍な「ぷろすぺる公爵」という登場人物の名前を設定する背景に、この『プロスペル・メリメ全集』の存在があったとしても不思議ではない。

三島由紀夫において最初に明確に「メリメ」が確認できるのは、昭和十七年九月に書かれ、「参考作品」に分類され、翻訳論が見られる、この『メリメ全集』となっている。先程、三島由紀夫においてラディゲとメリメの位置が遠くなかったことを確認したが、ラディゲと同じくメリメも教えられたものではなく、自ら発見したものであるとしていた。また、作品においてもメリメを引用している。最初に確認できるのは、昭和二十二年に発表された『夜の仕度』一八に登場する。

> 彼は頼子の兄の書棚から取出したメリメのシャルル九世年代記を読んでいた。一九

この「シャルル九世年代記」である。『夜の仕度』は、交際のきっかけを女性が作るという物語だが、そこに使われたメリメ作品『シャルル九世年代記』(*Chronique du règne de Charles IX*, 1829) は、メリメが晩年まで書簡のやりとりをすることになった女性、ジェニイ・ダカン (Jenny Dacquin, 1811-1895) が初めてメリメに書簡を出すきっかけとなった作品とされている。内容は兄弟で新教と旧教の宗教的対立の渦に巻き込まれる話であり、宗教的対立の愚かさについて示されたものだが、この作品が往復書簡のきっかけとなった作品であることについては、三島由紀夫の蔵書にある春陽堂版の『メリメの手紙』(昭和八年七月) の「はしがき」で触れられている。三島由紀夫の『夜の仕度』における頼子と青年の物語はこの逸話に重なるため、逸話を作品化したものが『夜の仕度』であることを「シャルル九世年代記」が示していると考えられる。

次なるメリメの引用作品『純白の夜』二〇は、銀行家の娘、郁子をめぐる恋愛物語だが、ジェニイ・ダカンとメリメとの往復書簡にある言葉が用いられている。

> 恋愛とは、勿論、仏蘭西(フランス)の詩人が言つたやうに一つの拷問である。どちらがより多く相手を苦しめることができるか試してみませう、とメリメがその女友達へ出した手紙のなかで書いてゐる。二一

ここに引用されているメリメの言葉は、春陽堂版『メリメの手紙』からのものである二二。メリメについての三島由紀夫の言及は多々あるが、自決前、ラディゲがすでに過去のものとなり、唯一の書となっていた山本常朝の『葉隠』について述べる上でもメリメが引用されている二三。ここで引用されているメリメの言葉は、同じく『メリメの手紙』からのものとなっており、メリメの言う

細部にこだわりを持つことの大切さが武士道につながるものであるとされて用いられている。従って、自決に至る最期の時に及ぶまでメリメの占める位置が三島由紀夫にあったと考えられる。

三、「死」そして「美」

1、三島由紀夫における「死」と「美」

三島作品に「死」と「美」を辿ろうとすると、全作品に及ぶことになるかと思われるが、三島由紀夫は、文壇に登場する以前から、「死」と「美」に対する関心を持っていたことが確認できる。「死」については時代的背景により、ごく身近な問題であったとされ、三島由紀夫自身が後に語っているところでは、早くに戦死すると思っていたことにより、ラディゲの向こうを張ってラディゲのような作品を書きたいとしていた[二四]。

最初に「死」について確認できるのは、平岡小虎として学習院時代に創作した詩集「こだま」に確認でき[二五]、また、最初の「美」は、平岡公威としての作品集「公威詩集1」に確認できる[二六]。そこに見られる文壇に登場する以前における「死」と「美」は、それぞれ独立し、「死」は女性と共に語られ、「美」は遠い存在とされるなど、主体とは離れた存在であり、完全に客体として表現されている。ところが、三島由紀夫として文壇に登場するに及び、作品において、「死」と「美」が徐々に近づいてゆく。

三島由紀夫としての最初の作品『盗賊』において最初に見られる「美」は焼失する炎の美であるが[二七]、第一章は「物語の発端」[二八]と題され、エピグラムには、オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイ』(*The Picture of Dorian Gray*, 1890) が使われ、青年、明秀が「美しい子」と書いて「よしこ」と読む令嬢に思いを寄せ、「美」に惹かれる青年が描かれている。しかしながらこの作品は第二章が第一章に先立って書かれており[二九]、テーマが「死」となっている。従って、三島由紀夫としての作品の最初のテーマは「死」であったことになると考えられる。作品内で最初に「死」が出てくるのは、次の一節である。

> 一度はあれほど確乎としたもののやうにみえた死の決心を、ときたま忘れてゐる瞬間がある[三〇]

心中として「死」が完成することが描かれている。

次に『仮面の告白』では、作品冒頭部のエピグラフにドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』第三篇の第三における「美」が用いられている。

> 美—美といふ奴は恐ろしい怕かないもんだよ！〔中略〕理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目には立派な美と見えるんだからなあ。一体悪行(ソドム)の中に美があるのかしらん？[三一]

従って、『盗賊』で、先ず「死」があり、次に「美」をテーマとしたことになり、三島由紀夫にとっての作品創出において最初のテーマが「死」そして「美」であったことになると考えられる。以後、「死」と「美」は、作品において、様々な形で表現される。

古代ギリシア人の理想は、美しく生き、美しく死ぬことであった。わが武士道の理想もそこにあったにちがひない。[三二]

このようにギリシャの「美」と「死」を日本の武士道に重ね、「美」と共に「死」を見ており、武士道の理想として「美しい死」が挙げられている。そしてギリシャ的身体の「美」、「美」の一回性、といった「美」へと収斂してゆき、「死」と「美」の同時性、闘牛士・武士道における「死」そして「美」へと至ることになる[三三]。

2、メリメにおける「死」と「美」

一方、メリメにおける死あるいは美の問題は、三島由紀夫が最後に至ることになった「死」及び「美」の観念の世界に一致する闘牛士の世界観に早い段階で出会い、そこから作品を創出してゆくことになる[三四]。闘牛士の世界は、演劇のような虚構のスペクタクルの世界であると同時に、闘牛の死あるいは闘牛士の死という現実世界に属する「死」が結末としてあるため、そこには虚構世界と現実世界が同時に存在している。スペインでは闘牛において「死」が崇高なものとされており、美しい「死」が望まれる。スペインを舞台とし、闘牛士が登場するメリメ作品では『カルメン』が知られているが、先に触れたように三島由紀夫が初めて強く心を動かされ、そのような作品を書きたいとしたラディゲ作品『肉体の悪魔』の冒頭部に使われているのが「カルメン」である。

三島由紀夫が西洋の短篇小説の模範として挙げているメリメ作品『トレドの真珠』もまたスペインが舞台となっている。この作品はメリメが参加していたミュッセ（**Alfred Louis Charles de Musset, 1810-1857**）のサロンで読まれていた「スペイン、イタリア物語」（***Contes d'Espagne et d'Italie***）をテーマとしていた時期に創作された作品であり、先ず、どちらか甲乙つけがたい〈朝日〉と〈夕日〉、次に〈オリーヴ〉と〈アーモンド〉、そして、〈ヴァレンシア人〉と〈アンダルシア人〉が挙げられた後、原文では最上級が使われ、最も美しい女性としてヴァルガス村のオーロラ、それが「トレドの真珠」であることが示されている。その「トレドの真珠」を巡って決闘が行われ、闘いに敗れて今にも死なんとする最後の時に及んで「トレドの真珠」の顔は白刃で傷をつけられ、物語りは終わりを迎える形となっており、原文で最後の単語は、〈**beau**〉すなわち「美」となっている。「美」である「トレドの真珠」を巡る決闘において、「死」と共に「美」が消失し作品は終わりを迎える。

一方、短編小説のお手本とされている『マテオ・ファルコーネ』はメリメにおけるモラルの時代とされる時期に書かれた作品であり、裏切り行為をなした息子が、曲ったことを許さぬ父マテ

オ・ファルコーネにより「死」の判決を受けるという作品である。結末部で息子は神に祈るモチーフが使われてはいるが、メリメは十八世紀思想継承者であり、自由主義的思想の立場をとっていた。その背景には、母方の曾祖母ボーモン夫人（Jeanne-Marie Leprince de Beaumont, 1711-1780）の存在も少なからず影響していたのではないかと考えられる。ボーモン夫人は『美女と野獣』（*La Belle et la Bête*, 1757）をまとめたことで知られているが、教育者として数多く著した教育書は、ルイ十六世を始めとしてフランスの王子教育に使用されていた[三五]。そのボーモン夫人は旧教が支配的であるフランスを離れ、新教が支配的である英国に滞在していた時期に日本の武士に関する書を著している[三六]。西洋とは全く異なる東洋の日本は九州豊後の大名の子息が成長してゆく過程が描かれており、日本の風習やキリシタン文化、精神のあり方についてなどがまとめられたものとなっている。こうした教育書をなした祖母を持つメリメの母は教育熱心であったとされている。十八世紀思想を継承するメリメ家において、家庭教育は重要な位置を占めていたと考えられ、母方の曾祖母が記した教育書によってメリメが教育を受けていたとしても不思議ではない。従って、メリメは幼くして日本の武士についての知識を持っていたと考えられる。メリメの蔵書は焼失してしまい残ってはいないため確認することはできないが、メリメのモラルの時代に書かれた作品『マテオ・ファルコーネ』は、モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne, 1533-1592）が『エセー』（*Essais*, 1580）において示した「死」の在り方、古代ギリシャ思想世界で否定されてはいなかった、尊い「自死」を肯定する立場を示しているとも考えられる作品となっている[三七]。詳しくは拙論において示しているが、漱石などもこの『マテオ・ファルコーネ』に日本の武士を見ている。三島由紀夫が最終的に辿り着いた武士道における「死」、道徳的「美」が『マテオ・ファルコーネ』にあることを三島由紀夫が見たことにより、作品は「お手本」とされたとも考えられる。

そして三島由紀夫が自決前に唯一の書とした『葉隠』における「死」すなわち「美」はメリメのモラルの時代に発表された作品『マテオ・ファルコーネ』における武士道的「死」あるいは「美」に通じるものであり、『トレドの真珠』における「死」と共に消失する一回性の「美」が武士道に重なるものであったため、すでに見てきたように『葉隠』を語る上でメリメの言葉が用いられるに至ったと考えられ、メリメ作品が「お手本」であり「模範」とされたのではないかと考えられる。

3、『憂国』

ここにただ一つ残る本がある。それこそ山本常朝の「葉隠」である。[三八]

三島由紀夫が自決前に唯一の書としたこの「葉隠」は、佐賀の鍋島藩士、山本常朝（一六五九－一七一九）によるもので、公にすることを目的としたものではなく、同藩の田代陣基（一六七八－一七四八）の筆録の写本が残るのみで、詳しいことは明らかに

されていないが、武士道についての心構えについてまとめられたものである。その「葉隠」について書かれた三島由紀夫の『葉隠入門』において、メリメの言葉を引用しているのは第九項であり、続く第十項は、次の書き出しとなっている。

第九項で述べた、日々に覚悟をきめていかねばならぬ大きな思想の根源は、「葉隠」にとつては武士道において死ぬことであつた。三九

ここに、第九項は「葉隠」において度々取り上げられる冒頭部「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」四〇が思想の根源にある項目であるとしている。従って三島由紀夫が最終的に辿り着いた武士道における「死」、「葉隠」における「死」を語る上でメリメの言葉が用いられたことになり、三島由紀夫が理想とした「死」は、メリメと共にあったことは確かであると考えられる。その武士道における「死」を主題とした三島作品に『憂国』四一がある。二・二六事件にあたり「自決」の決意をした中尉とその妻の最後が描かれている。二人は「美男美女」四二であり「健康的な肉体」四三という設定は、三島由紀夫が理想とするギリシャ的「美」であり、そのどちらとも甲乙つけ難い「美男」「美女」の最も美しい表現としての営みが描かれたのち、いずれもが、「自決」という三島由紀夫が最終的に辿り着いた理想的な尊い「死」を迎える作品となっている。三島由紀夫によって「模範」とされた『トレドの真珠』における二項対立の構図、そこにある「死」と「美」、また、「お手本」とされた『マテオ・ファルコーネ』にある尊い「死」が、『憂国』において三島由紀夫の理想とする世界観として表現されている。三島由紀夫は次の言葉を残している。

僕は芥川龍之介や、現代巨匠の作品に（偶然の一致かも知れないが）メリメの大きな影響を見るものである。かくの如き、人に知られぬメリメの濾過は、幸運にして末梢的に非ずして精神的に無理なく行はれてゐる。四四

これはまた、三島由紀夫自身の作品にもあてはまるのではないかとも考えられる。

おわりに

ラディゲに惹かれた三島由紀夫が、いかにしてメリメ作品を受容し、模範とし、お手本とするに至ったかについて見てきたが、そのもとにはメリメ自身の自由主義的ギリシャの思想世界、メリメの母による家庭教育のもとになる母方の曾祖母ボーモン夫人の教育書（そこに日本の武士について書かれたものがあった）などがあったことから、メリメにおける「死」あるいは「美」は三島由紀夫の理想とした武士道における「死」あるいは「美」に通じるものであったことが確認できた。三島作品には「死」と「美」が溢れ、それは創作し始めて間もない段階では遠く離れた客体として存在していたが、徐々に主体的なものと化してゆくことにな

り、メリメが作品世界で示した「死」と「美」の一回性、同時性の世界観を、三島由紀夫は最終的に現実世界で主体的なものとするに至った。

三島由紀夫は谷崎潤一郎論において、

美を実現するには、現実を変容させればそれでいいのだ。四五

と書いている。メリメ作品に見られる虚構世界における「死」と「美」を現実世界に一致させること、物語世界と現実世界、それはフランスにおいてどちらも〈histoire〉と表記されるが、小文字の〈histoire〉である「物語世界」と大文字の〈Histoire〉である「現実の歴史」との一致は、三島由紀夫と平岡公威とを一致させることであり、メリメ作品にあった武士道に通じる古代ギリシャの思想世界、『葉隠』にある「死」すなわち「美」を現実世界において主体的なものとしたのが「自決」であり、それにより「死」と「美」が現実世界で一致することになり、三島由紀夫の理想とする世界観が完成したのだと思われる。

補

なお、本文引用は『決定版 三島由紀夫全集』新潮社、平成十二年十一月～平成十八年十二月に拠り、初出が分かっているものについては括弧内に示した。

注

一 『決定版 三島由紀夫全集第三十一巻』六十一～六十三頁。(『婦人公論』別冊付録、中央公論社、昭和三十四年一月)

二 『決定版 三島由紀夫全集第三十四巻』七一五頁。(『波』新潮社、昭和四十四年七・八月号)

三 「ラディゲに憑かれて—私の読書遍歴」『決定版 三島由紀夫全集第二十九巻』一四六頁。(『日本読書新聞』日本読書新聞社、昭和三十一年二月二〇日)他。

四 『決定版 三島由紀夫全集第三十八巻』五四二頁。(清水文雄宛未発送書簡、昭和十六年九月十七日付)

五 「俊民氏に教へられし雰囲気は、リラダンなり、「月下の一群」なり、ボオドレエルなり、芥川龍之介なり、志賀直哉なり、マリイ・ロオランサンなり。これらは我が既に自ら得たる雰囲気、谷崎潤一郎、ワイルド、レイモン・ラディゲ、堀辰夫、プロスペル・メリメエ、郡虎彦等の世界とあやしき混淆をなせり。」『決定版 三島由紀夫全集第二十六巻』四二五頁。(「平岡公威自伝」、未詳、昭和十九年二月二十八日付)

六 『決定版 三島由紀夫全集第二十八巻』八十二～八十三頁。(「レイモン・ラディゲ」『ラディゲ全集』中央公論社、昭和二十八年六月)

七 『決定版 三島由紀夫全集第三十二巻』六二四～六二六頁。(「一冊の本—ラディゲ「ドルヂェル伯の舞踏会」」『朝日新聞』朝日新聞社、昭和三十八年十二月一日)

八 『決定版 三島由紀夫全集第二十六巻』三四〇～三四一頁。(「本のことなど」参考作品、昭和十七年九月二十八日付)

九 『決定版三島由紀夫全集第三十四巻』四七五頁。(『葉隠入門—武士道は生きてゐる』カッパ・ビブリア、昭和四十二年九月)

一〇 『決定版 三島由紀夫全集第二十七巻』二七八～二八一頁。(「クレエヴ公爵夫人」—梅田晴夫訳、未詳・昭和二十五年二月十七日)

一一 『決定版三島由紀夫全集第二十六巻』八十二頁。(「ラディゲ」参考作品、未詳、昭和十五年頃。)

一二　注四に同じ。

一三　執筆年月日は昭和十五年春（正月）→同年三月二十四日とある。『決定版三島由紀夫全集第十五巻』七〇〇～七〇一頁より。

一四　注三に同じ、一四七頁。

一五　注六に同じ。

一六　学習院「輔仁会」雑誌、昭和十四年十一月三〇日号。

一七　（柳田国男の『遠野物語』について）嫁と折合のわるい母を殺す倅の物語は、プロスペル・メリメも三舎を避ける迫力と簡勁の極みである。この一篇熟読玩味すれば、小説とはいかなるものかがわからう。（「小説とは何か」より。）『決定版三島由紀夫全集第三十四巻』七三〇頁。（『波』新潮社、昭和四十五年一月号）

「ここには幾多の怖ろしい話が語られてゐる。〔中略〕しかしメリメのやうな残酷な簡潔さで描かれたこの第十一話は、」（「柳田国男「遠野物語」―名著再発見」より。）『決定版三島由紀夫全集第三十六巻』一九四頁。（『読売新聞』読売新聞社、昭和四十五年六月十二日）など。

一八　『決定版三島由紀夫全集第十六巻』四四一～四七一頁。（『人間』鎌倉文庫、昭和二十二年八月号）

一九　右に同じ、四六五頁。

二〇　『決定版三島由紀夫全集第一巻』三六五～五二八頁。（『婦人公論』中央公論社、昭和二十五年一～一〇月号）

二一　右に同じ、四九九頁。

二二　『メリメの手紙』中井程一訳、春陽堂、昭和八年七月、二十八頁。

二三　注九に同じ、五〇六頁。

二四　「―天才ラディゲは二十歳で死に、そのやうな傑作を残したので、わたしも二十歳でおそらく戦争で死ぬことになるであらう自分をラディゲの像に仮託して、なんとかラディゲを自分のライバルにして、追いつかうとする目標にこの小説を利用してゐたのである。」、注九に同じ、四七五頁。

二五

「死」が、薄い紙のすぐ後で、
笑ってゐる。
「生命」が「死」に、
女をゆづらうとした時、
おゝ
まばゆい光と共に扉が開かれる。

「聖（ひじり）なる女　クリスマス紀念（ママ）」より

『決定版　三島由紀夫全集第三十七巻』一六四頁。
（「こだま―平岡小虎詩集」昭和十一年十二月二十五日）

二六

遠いものは皆美しい
それらは想像の圏内にあるから。

美は必ず善を伴ふとはかぎらない。
時に悪の美は善のそれに勝る。

美に接近してはいけない。
硝子の神殿にいれておかなければならぬ。

強者のみる弱者の美は、
弱者のみる強者の美より常に美しい。

光をなげうち、それと闇とのふれあふ
瞬間を見ろ。それは美だ！

「美の五つの二行詞」より

『決定版三島由紀夫全集第三十七巻』三三七～三三八頁。
（「公威詩集1」昭和十四年五月二十四日）

二七 「暖炉では白樺が美しい火の色を見せて焚かれていた。」(『盗賊』第一章「物語の発端」より。)『決定版 三島由紀夫全集第一巻』十一頁。(「恋の終局そして物語の発端」『午前』南風書房、昭和二十三年二月号)

二八 注二二に同じ、九～三十四頁。

二九 『決定版三島由紀夫全集第一巻』三十五～七十一頁。(「自殺企画者」『文学会議』日本文芸家協会編、講談社、昭和二十二年十二月号)

三〇 『決定版三島由紀夫全集第一巻』七十二頁。(「出会」『思潮』昭森社、昭和二十三年三月号)

三一 「美―美と畏怖奴は恐ろしい怕かないもんだよ！〔中略〕理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目には立派な美と見えるんだからなあ。一体悪行の中に美があるのかしらん？〔略〕―ドストエーフスキイ「カラマーゾフの兄弟」第三篇の第三、熱烈なる心の懺悔―詞」(『仮面の告白』第一章エピグラム)

『決定版 三島由紀夫全集第一巻』一七四頁。(河出書房企画「第五回書き下ろし長篇小説」『仮面の告白』昭和二十四年七月)

三二 「古代ギリシャ人の理想は、美しく生き、美しく死ぬことであった。わが武士道の理想もそこにあったにちがひない。現代日本の困難な状況は、美しく生きるのもむづかしければ、美しく死ぬことはもつとむずかしいといふところにある。〔中略〕ひとたび武を志した以上、自分の身の安全は保証されない。もはや、卑怯未練な行動は、自分に対してもゆるされず、一か八かといふときには、戦つて死ぬか、自刃するしか道はないからである。しかし、そのとき、はじめて人間は美しく死ぬことができ、立派に人生を完成することができる」『決定版 三島由紀夫全集第三十四巻』四四〇頁。(「美しい死」『平和を守るもの』田中書店、昭和四十二年八月)

三三 「―男のやる仕事でももつとも荒つぽい、命を的にかけた仕事で、しかもこれほど優雅と美を本質とする仕事もめづらしい。〔中略〕闘牛士は、危険によつて美しく、死によつていよいよ美しい。」

『決定版 三島由紀夫全集第三十四巻』一三〇頁。(「闘牛士の美」『平凡パンチ女性版』平凡社、昭和四十一年六月)

「飛行機が美しく、自動車が美しいように、人体は美しい。女が美しければ、男も美しい。」『決定版 三島由紀夫全集第三十五巻』一八六頁。(「機能と美」・『男子専科』スタイル社、昭和四十三年九月)

三四 詳しくは、拙論「プロスペール・メリメにおける見ることの意味あるいは歴史感覚―一八四〇年を中心にして―」(『フランス文学論集』第四十一号、十三頁-二十六頁、九州フランス文学会、二〇〇六年十一月)

三五 M.-A. Reynaud, *Madame Le Prince de Beaumot*, Publibook, Paris France, 2002. によると、*Le magasin des Enfants*, *Le magasin des Adolescents*, *Le Triomphe de la Vérité* を始めとして七〇巻に及ぶ教育書はルイ十六世、ルイ十八世、シャルル十世の教育に用いられ、十九世紀中頃までにヨーロッパ各国語に翻訳されている。

三六 *Civan, ou Cida, Roi de Bungo*. Voir art. Baldensperger. Dédié à Joseph II 1754.

三七 詳しくは、拙論「鈴木三重吉におけるメリメ受容―死の問題を中心にして―」(『COMPARATIO vol.11』二〇～二十七頁、九州大学大学院比較社会文化学府、二〇〇七年十一月)

三八 注九に同じ、四七五頁。

三九 同右、五〇六頁。

四〇 『葉隠』和辻哲郎・古川哲史校訂、岩波文庫、二十三頁。

四一 『決定版 三島由紀夫全集第二〇巻』十一～三十九頁。(『小説中央公論』中央公論社、昭和三十六年一月冬季号)

四二 同右、十四頁。

四三 同右、十五頁。

四四 『決定版 三島由紀夫全集第三十六巻』五一三頁。(「ラディゲとその作品」未詳。)

四五 『決定版 三島由紀夫全集第三十二巻』一二五頁。(「谷崎潤一郎論」『朝日新聞』朝日新聞社、昭和三十七年十月十七日)